

臨床獣医師の喜びとは…

児玉和仁[†]（児玉どうぶつ病院院長・福岡県獣医師会）

私が大学を卒業し、小動物臨床獣医師になったのは、平成元年だった。当時はバブルの時代で、ペットブームもあり動物を飼い始める人たちも多くなってきて、それに伴い動物病院の数も増えてきた時代だった。

私は大学を卒業したものの、小動物臨床に関しては全く何もわからない状態で、動物病院に勤め始めた。勤務先は獣医師にできることは何でもするという方針で（当時はどこの動物病院もそうだったと思う）、内科・外科などあらゆる分野、さらにブリーダーや飼い主からの要望があれば断尾・断耳なども行っていた。また、往診もあり、多い時には数十軒も飼い主の家を回ったこともあった。病気としては、様々な伝染病の発生もあり、ジステンパーが流行した時にはワクチンを接種した犬だけ感染せず、飛び火するように近所の犬が発症し、ワクチンの重要性を改めて考えさせられたこともあった。私にとっての勤務獣医師時代は多くの症例を経験し動物の扱い方、飼い主への対応、病気との向き合い方など、後に開業する基本を学んだ時期であった。

その勤務も4～5年が過ぎ、分院を任されるようになり、全て自分の判断で診断治療を行い、さらに病院経営など考えるようになって、今後は「得意な分野が何か必要になる」と考えるようになった。ちょうどその時期、アメリカから帰ってこられた麻布大学の信田先生が監修されたがんの診断治療（獣医腫瘍学）に関する教育ビデオを見て、大きな衝撃を受けた。動物にも抗がん剤を投与することで延命効果がある（リンパ腫など）ことや、固形がんでも早期に治療することで根治できる可能性があることなど、当時がん治療に限界を感じていた自分にとって、そのビデオ内容は大きな希望を与えたものだった。それから何の縁もゆかりもない信田先生の元で、勉強したいという思いが強くなり、わずかなつてを頼りに麻布大学放射線学教室の研究生となり、腫瘍科の診療に参加することになった。勤務獣医師だった私は、経営者である本院の院長に、週一回の休みをいただき、栃木県から相模原の麻布大学へ片道3～4時間かけて、車で通学することになり、大学の診療日の前日夜中に栃木を出て、車中で寝たり、大学のソファで仮眠を取り、診療をし、夜遅くに栃木に帰り、翌日分院の診療を行ってい

た。今思えば、ハードな生活をしていたと思うが、当時は新しい知識や技術を身につける喜びが大きく、大学に行くことが楽しかったことを思い出す。その約二年間に渡る研究生時代は、がんの診断治療に関する多くのノウハウを学ぶことができただけでなく、合理的な考え方や、何かをする時には何のためにするのかを考えること（常に基本は何かを考えること）を教えていただいたと思っている。この考え方は診療以外でも今の自分に大きな影響を与えている。

その後、福岡で開業して16年がたった。開業当初より高度で専門的な知識が必要になってくると考えていたとおり、年々動物と人との関わりが深くなり、動物は飼い主にとって家族の一員になってきた。そのため、獣医師に対してより高いレベルの知識を要求されるようになっていく。当院では、基本的に一次診療動物病院として勤務獣医師を含め、4名で日々の診療を行っている。できるだけ飼い主や動物にとって最も良い治療を考えて、分野によっては、より高度な技術や知識を持った先生への紹介を積極的に行っている。福岡は、大学病院など高度動物医療センターはないが、それぞれの分野で活躍されている先生方も多く、大変助かっている。当院でも、妻（児玉恵子）とともに日本獣医がん学会のI種認定医を取得し、がん治療の一つの病院の柱として診療してお

児玉和仁

—略歴—

- 1989年 鹿児島大学農学部獣医学科修士課程卒業
- 同年 栃木県 動物病院川上勤務
- 1994年 麻布大学獣医放射線学研究生
(信田卓男先生に師事し腫瘍学を専攻)
- 1997年 福岡市にて児玉どうぶつ病院を開業
- 2003年 日本獣医がん研究会（現在学会）獣医腫瘍科認定医I種 取得
現在に至る



[†] 連絡責任者：児玉和仁（児玉どうぶつ病院）

り、最近では紹介症例やインターネットを見て来院する腫瘍症例が少しずつ増えてきており、当院が地域の高度動物医療の一翼を担えるように診療に励んでいる。

しかし、現状では診療とともに、獣医師会や学会の仕事など、年々増えてきて、日々の仕事に追われているのも事実である。その時、自分は何のためにこの仕事をしているのか、を考えることがある。我々獣医師にとっての喜びとは、何だろうと考えた時に、私は、飼い主から信頼されること、だと思っている。動物は、一般的に寿命は人より短く、飼い主が動物の死を経験しなければ

ならない。ある時、遠方よりがん治療に通院されていた方の犬が亡くなり、数カ月後、その飼い主が、子犬を連れて来院され、「初めての診察は先生に診てもらいたいから、連れてきました」と言われた時は、本当に嬉しかったことを思い出す。我々の仕事は、全て良い結果とならないこともあるが、心から感謝される仕事なのだ改めて感じさせられた。

今後も、目の前の症例と真摯に向き合い、飼い主に信頼される獣医師になれるよう、日々少しずつでも努力していきたいと考えている。